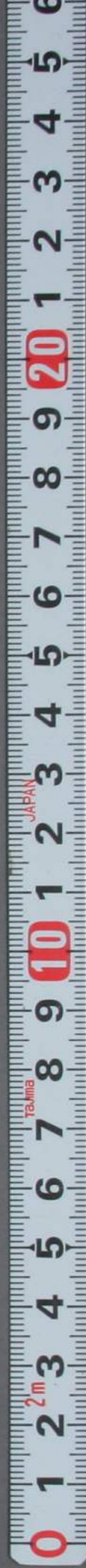


廣文公詩集

廿六

74
26



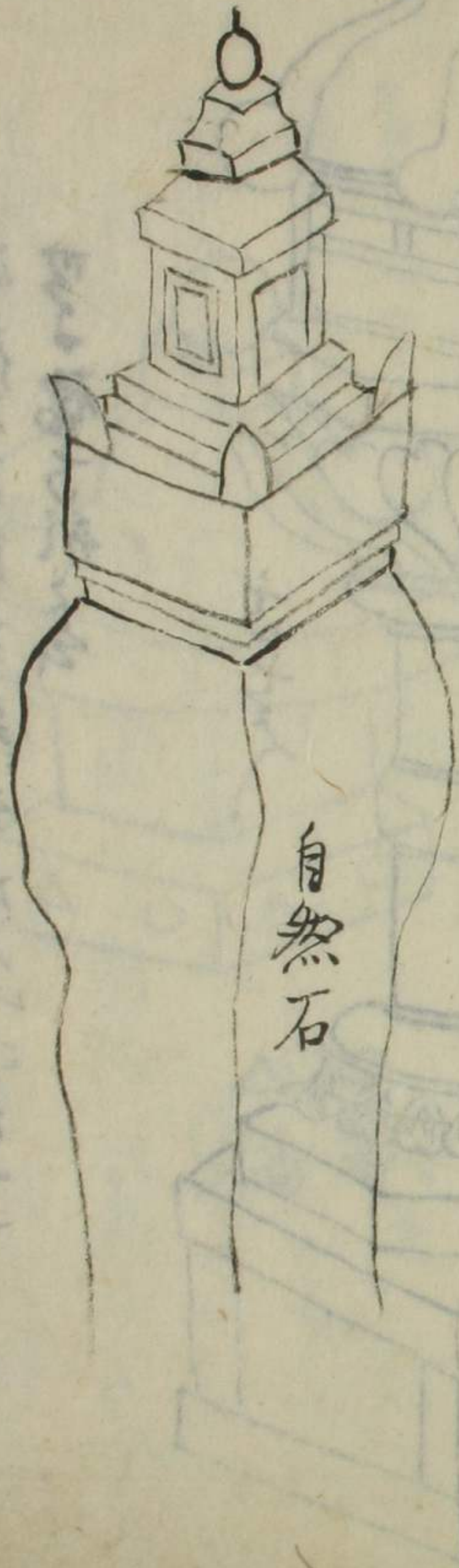
門 7 9
卷

盤源余錄云
石燈台

在大和山古市郡^志林島寺又於^志蓋寺^心系
形極奇古粗似浮屠以自然石敬手捧
言之人等件

因寺又東光山龍蓋寺

自然石

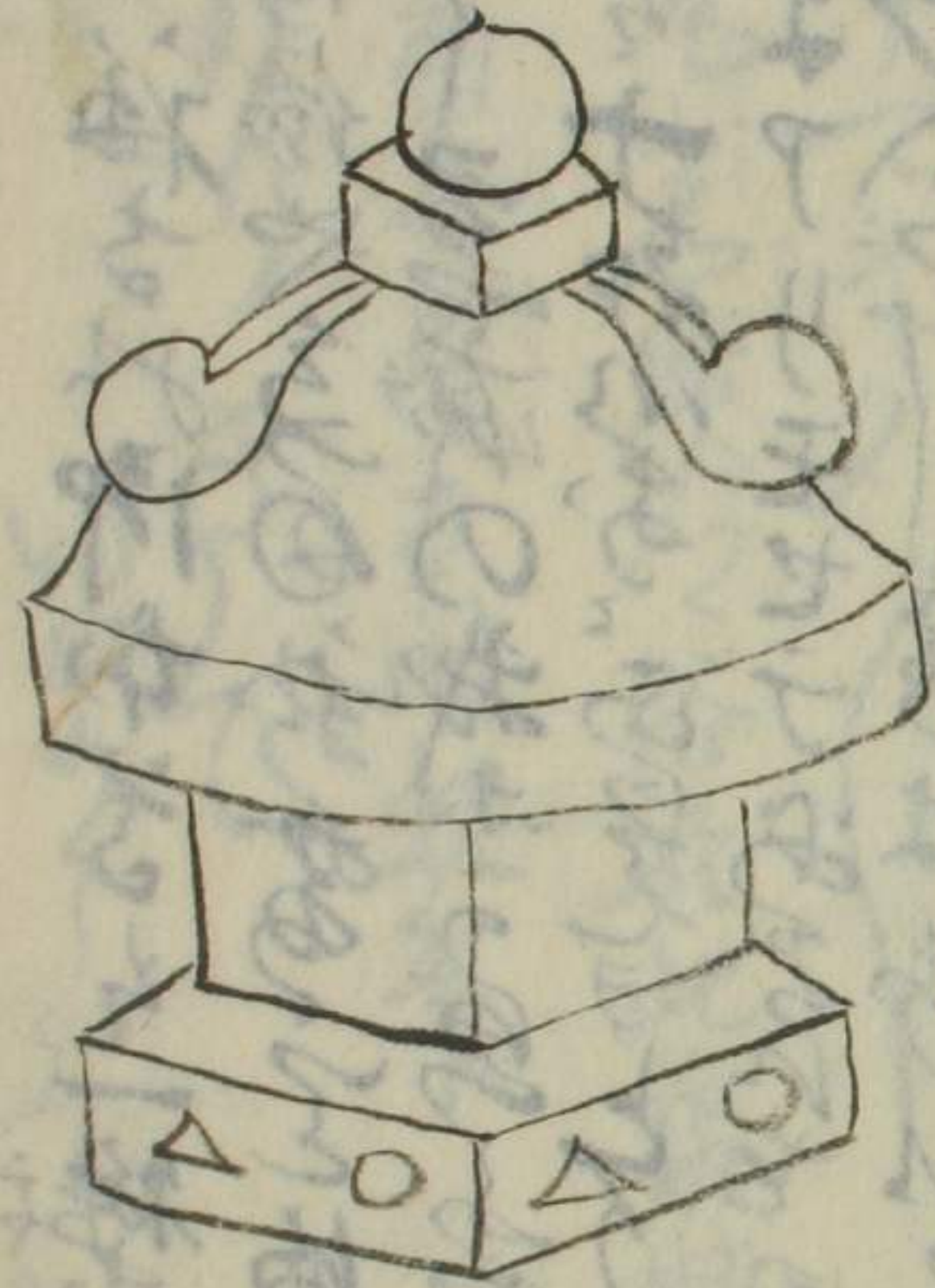


盤源余錄云
石燈台在大和山古市郡林島寺又於蓋寺心系
形極奇古粗似浮屠以自然石敬手捧言之人等件
因寺又東光山龍蓋寺

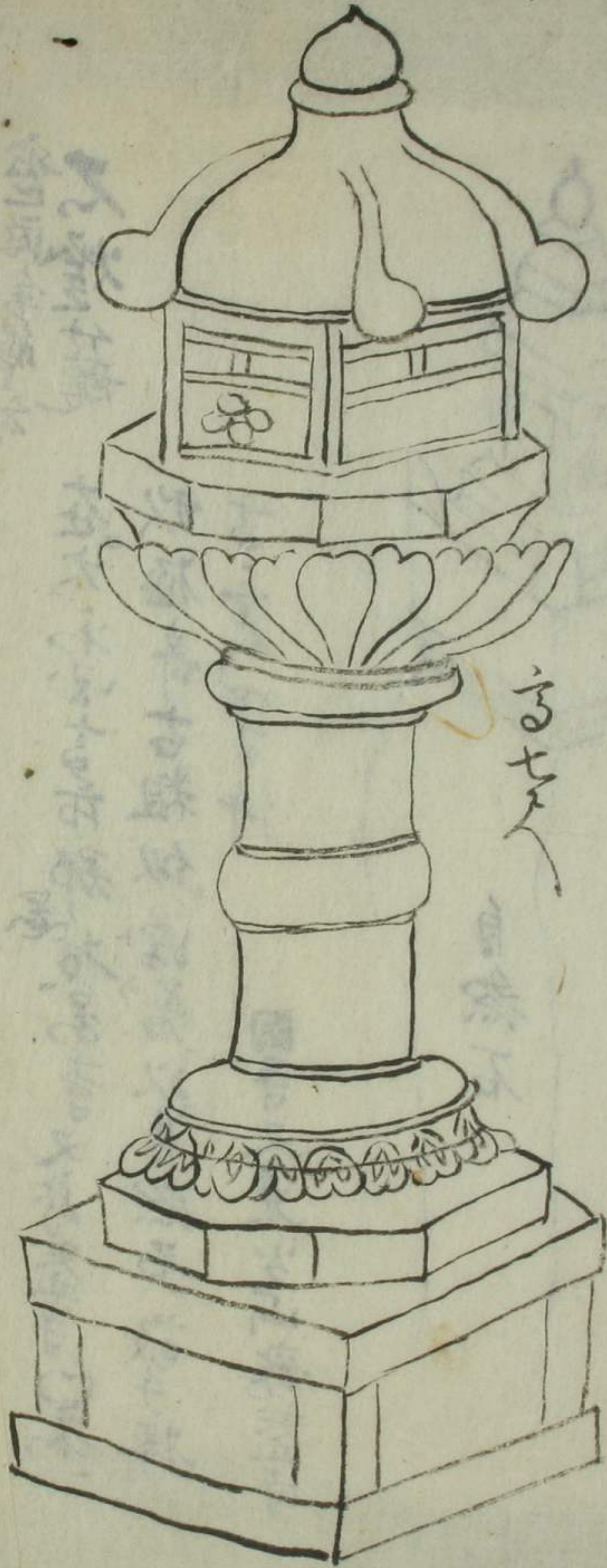


石燈系在因寺

右但有蓋與一其臺甚古拙所彫花紋非近時物或是古子時物



△ 菊
○ 橋



古七人

石燈系在大和寺市郡橋村德寺又菩提寺古僧云
至德寺子所集然形狀似不甚古
世了橋古形云

本寺河原院十六
俗三河原院也ト
云伝感澄西生徒
ハ骨相異体ナリト
ヲ圓白無ニサセ也
ふ字易ニ余ニテ
令ノ形ニウツサセ
ラルト云

くらくらくら一すくら
またのしゅら
あくせんらうらうら
すくおら
くらくらまたの
しゅら
申

曹天閣嘗浴於此
因召善福寺住持澄西而問法後病革時手書以
示澄西乃寺之所傳襲也

按津山有河原院堂新築今陽山蘭若院曹洞
經尺長一尺一寸九分中一寸二分

高宗天皇の
御製乃御筆也
ありき
右鳥居之屋々親筆經冊
目前存存

柿一葉
表紙の
浮き
先
物

十月十五日 神祖 汗名 彦輝

河内 彦輝

梯一筋らきんじん
重書は原入の重細
はる中書は白く
ら原の白く
あはれ

同刻可也

蘭若院 女侍

由縁 彦輝

貞柿

阿まの山乃

釜の山乃

家は

釜の山乃

山乃 押のえん

山乃 押のえん

阿まの山乃

大御取様乃

阿まの山乃

佛書
~~~~~

日守不承

當寺所  
之文法  
之書  
今之書  
馬山  
河内  
~~~~~

日守不承
是之書

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~


百石りか

天正十一年

福

あつこ

夫人祢補子君云

- 一 天正十一年十月廿九日
- 一 此所記書て西条河津
- 一 此所記書て西条河津
- 一 此所記書て西条河津
- 一 此所記書て西条河津
- 一 此所記書て西条河津
- 一 此所記書て西条河津
- 一 此所記書て西条河津
- 一 此所記書て西条河津
- 一 此所記書て西条河津

- 一 志守りしつ
- 一 井原兼右
- 一 兼少
- 一 兼少
- 一 兼少
- 一 兼少
- 一 兼少
- 一 兼少
- 一 兼少
- 一 兼少

宗子
一 宗子
二 宗子
三 宗子

利休山崎川
若福寺
志守宗及

一 萬里山中の藤原の事

延文才三層堂東下自天凶出幸く逆風蒼
未和軍卒くきき務活深ふ事お端身之
西角約今お端出つく一夕に得ちんく妻
微仙教く滅期考れ西隣記意の臨祐
燦霞子片恨東嶺并神而嘆利物并
端く推き一系宮之中吟悉く餘述二首く
早懐表一心之中晴而也

道倫隱士

西に子一歳よおきてくちますも
よめいす海々み祿乃りいひのち

邦系へた出た乃山七雪ぬり

都小とまればはむれ居り

延文二年ハ葛原乃ち平と本花園に在て園山
あつまはたはけ文を考ふるよちんの妻微と并
さとちんのと云西隣海者四く山のハと并の西に
東山津神うく一并さ新羅の神のこと
必きと并さ元徳の源倫るま一且藤原乃小
宛の延文の号と用いさへうはは平十三年とを
つま

藤原乃ハ吉田大威資経乃の孫横大御云宣
慶乃の二男承仁也平西申山延生と初元三年

右の曾使列道は補ちてれしハ其置供事のたつと
以美をうれしるものかくて建武元年官拜起功
の美ゆりれりすはけんと思ふ美書文書時載
内山陰山陽あとの列道しては法皇の妙法と成さる
人と云れハ女陽内奏はさぬくけらまて中皇の帝
業女好習の利口は傾きると云ると傷むゆゑ風流
とまふいふことと云ふも良業は苦しくたす母は逆ひ
くハ二月十日の夜はれり母のたつりるやそとわぬ後の
世をともりれしより母のたつりて死やうは業承し
て伊佐をうき還幸の後十日の致仕の後赤衣は
正つてもあともむるは流る伊佐のたつりさる

集内一十の末の退年一山岩倉と云ふやて平二房
と云ふ僧を戒師として多年汗遍の傷冠を解て
十戒持律の法教を授けりは九年二十九
はとやれり山と云ふ母の人と云ふ一鬼や屋のねま
と云ふ人

棄息入無為志定誓息者

白頭を置り万重山 曠劫恩波盡塵乾
不是胸中義五逆 出家端的報親難
と破の障子のつよまぬして法正僧のつよまぬ
よとしてまゝまゝせしてゆめひりく武やまをる人保山
ふと号し一双丘の東なる地尾の夜をまゝし

翻して出陣し入りの御下を辱るを免れ出して行きて
七出陣を御下出陣の老いことこのまひりくハ士
卒亦ふいふりて総て返して討敵の首を討てハ
必多辱るをいふ我れてんとして自ら千代子
別りたるハあつてまうしてせしめる事よ
ついでに世の人のこいもれハそれら
ちりよ身をまうせして

一 松平信隆又と長河と云松平初の本義を尋ずるに
感念と改むと云る際山に他は出て来る所を仁
利子の道は危しりるに世を二感ふん御して時宗
より一に東道傳の令達するよつて松平と改め意を

凡月を花ぐりあつて泉なるよすしめてえん建氏
の表亂をあつてよる事れりるは御軍を氏公義倫云
る事あつたの及と表つれてはまられりてしる事
集まるるあつて後常光園持政良基と二条院の
分の豫りてあ書をあつてしりて是とあつてし
りる事つて批判してよらるしと名回覺迄と名付け
貞治二年の事この同年二月九日以後光嚴院の宮を
よつて氏松平の為明の御下を御下を御下を御下を
月一子この三年十月廿七日内侍を御下を御下を御下を
の御下ハ松平の御下を御下を御下を御下を御下を御下を
慶運降参法宗の 為好と名よる事つてしりてつてつてつて

巴方王と社をくさるる時巴方王を合て探歌古首
のふすまゝの村探何歌を足してとと立出らるる
唐及運探何のとりたる歌とつゝぬ歌とぬ智とく
あゝぬさぬまて飛とつゝぬ探何をたつたあう歌
を足して群と六首ぬ出つゝそのふとよよとせし
とて人々をわめつゝぬとつゝぬ探何とつゝぬとつゝぬ
探何とつゝぬ探何とつゝぬ探何とつゝぬ探何とつゝぬ
そ名もあも有るれとつゝぬ探何とつゝぬ探何とつゝぬ
りつゝぬ後靈山は伝つゝぬ又探何とつゝぬ探何とつゝぬ
つゝぬ西の山探何とつゝぬ探何とつゝぬ探何とつゝぬ
元年八十甲半なる探何とつゝぬ探何とつゝぬ探何とつゝぬ

寛文十四年七月二十一年と

探何とつゝぬ探何とつゝぬ探何とつゝぬ探何とつゝぬ
探何とつゝぬ探何とつゝぬ探何とつゝぬ探何とつゝぬ

あゝぬさぬまて飛とつゝぬ探何とつゝぬ探何とつゝぬ
探何とつゝぬ探何とつゝぬ探何とつゝぬ探何とつゝぬ

探何とつゝぬ探何とつゝぬ

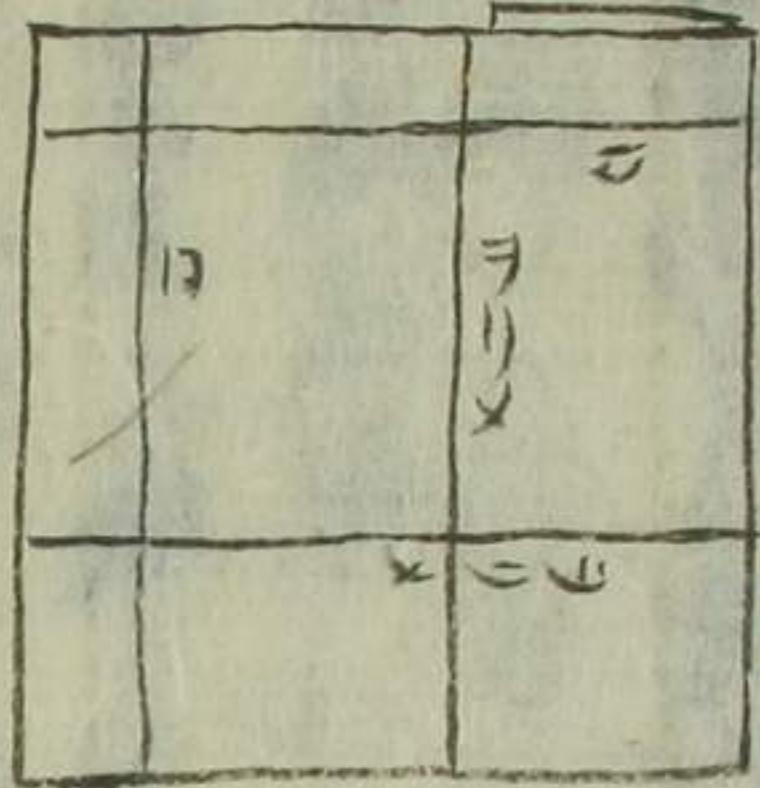
一 鷹
ぬまきつてわうぬるむりの子探何阿

探何とつゝぬ探何とつゝぬ探何とつゝぬ探何とつゝぬ

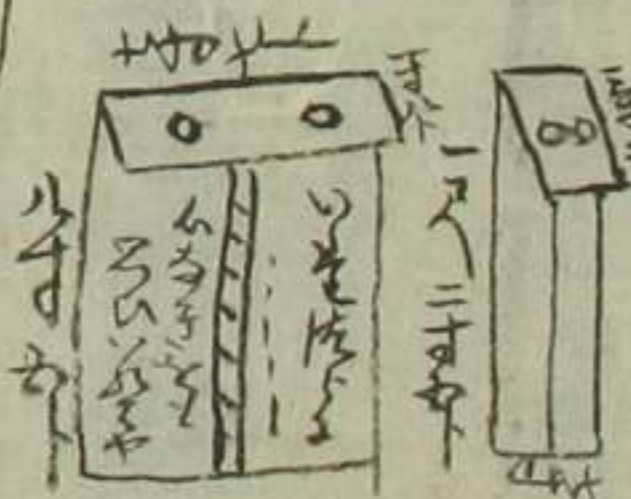
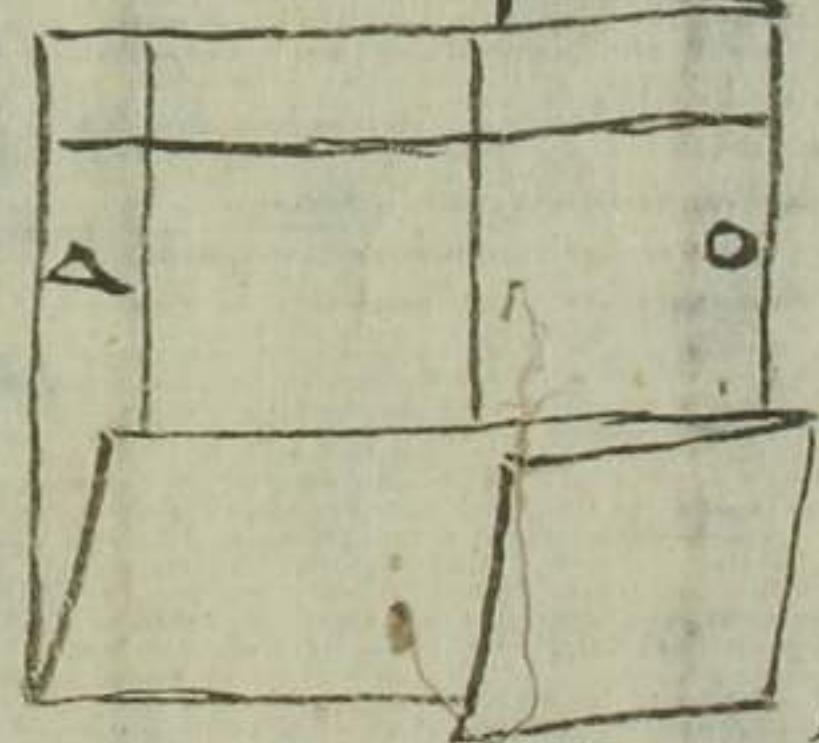


い道のり
あや
蛙乃初代
思あるは
ありいそや

カ一カ
必のや大
言を権威
つて又
井二カのや
おてつま



△下のあ
○下のあ
をのつり
袋とる



○土板屋
守
ハナカ

よとれて水川とて
踏のたよとる
夢山吹なると
か
流まををいしてや



おらの子と経賢と云権井の地当法平と五條屯
経賢の子と老尋と云同く物当法平たり老尋
の子と老尋と云お神木の窪園として橋大信都
法平と信平と法平のふたれ首祖よをちの神續古
今うあが集のゆえん
啓向ふ有海形紫屋寺什お哲何作人ハ
紫屋形什お哲何作の尺八を宗長法師宇津山
元と老人と名付てゆわることハそれともう我を留こハ
ちのの尺八の事とを避きて老人と云二字ハ
形成の字の陽派の歌の申を由縁と云ふに
押子の穴のつりは懸入してゆりけい官ハ山名を

おりのいしきとせ

けちぶと妻のふとこのゆりそくをたよと
おりのいつけくるふの飯白と入直代をひりハ
孫布とともも割き一やに死といふもの子匡
房のふ代やまると孫の割きをくれ一とて
物元御門のいしきと大なる御と割る白と

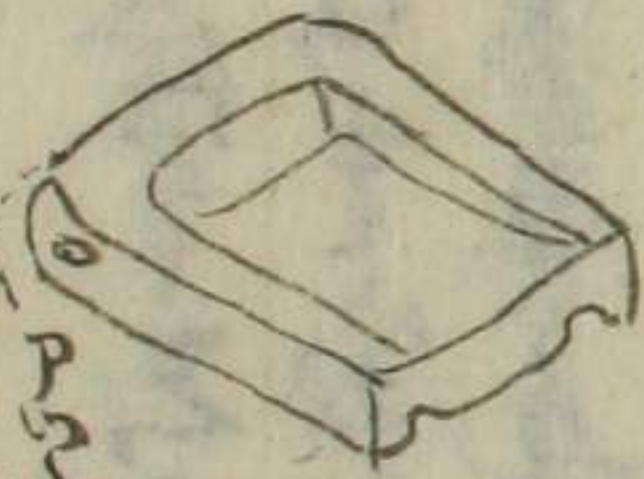
一 北畠入道宗季の遺言に依りて親房の八村上天皇身七を
子中務の具平親と十二代の子父入道宗季の御孫
西二信源氏をまの母八入及たか將隆を娘長女に
元年徳和元年九月十七日世に世に出家なり
信長宗季の伏見後伏見後二宗花園後醍醐朝代

上唐仕一有感のまゝとて神皇正統記感ある所
を考証存心名を親和を傳の山山と名を宮
林姓考と名を月憶西と名を及後馬の記と定
められりたりと名を遂て身退き一陶兼と名
海と名を山山子の徳房と名を揮つと名と云へられ
とも実ハ知幾者古之先字と云 兼辭のなを名
又後これ一なる一西平十三年 兼辭 四月十八日
六十七日と名を林姓考と名を兼記

北畠親房の相状

仔細相状
山田氏不存

表
二寸五分
四寸



表

引去りて
後孝ハ尊
氏十二代の後
清若半蓋臨蘭亭一過

即携一編高坐一匡休命侍姬焚護誕吸
清若半蓋臨蘭亭一過

寄因伯和
荒老蓬居抱素襟猶懷夙昔惑孤心忘年
舊侶唯君在其奈多情契潤深

寄因伯和
荒老蓬居抱素襟猶懷夙昔惑孤心忘年
舊侶唯君在其奈多情契潤深

宿湖上
蕉園弘辨竹山子以享和交

宿湖上
蕉園弘辨竹山子以享和交

春賦夜猶殘晴欄望正懸
一雁落湖天比屋寒烟外
將早矣不痛醉去禮

春賦夜猶殘晴欄望正懸
一雁落湖天比屋寒烟外
將早矣不痛醉去禮

淮佛

覃

餘花西復屋草為茵獨立西方古
銀盤一夕水東漸遙淮海萬民

餘花西復屋草為茵獨立西方古
銀盤一夕水東漸遙淮海萬民

書查嗣琛詩幅

四月九日天色清和出史館
過円光寺看紫藤世人所謂
蔓密葉不着一花大矢未意
松風瑟瑟耳乃賦一絕曰

四月九日天色清和出史館
過円光寺看紫藤世人所謂
蔓密葉不着一花大矢未意
松風瑟瑟耳乃賦一絕曰

欲見之藤花入寺門
藤花不見葉空繁
兩三四箇長松樹
落日清陰碧水昏
明日夙起讀朱竹垞曝書亭集
有此紫藤下

欲見之藤花入寺門
藤花不見葉空繁
兩三四箇長松樹
落日清陰碧水昏
明日夙起讀朱竹垞曝書亭集
有此紫藤下

醉歌同查上舍弟 嗣璫賦詩問者得查嗣璫所
書七律一幅未知為何人也遍檢詩書無所謂
嗣璫者讀而至此爽然自失恍然如遇查君
於紫藤花下者亦足以償時昔之失意矣十
日清晨南畝子題畝傍山陵東山伯作嘗示 陪臣
魚位紫邦彦藁遺陵終向里人求羊死孤
松數畝郎不有全神用帝統誰教呂庶脫夷
流厖王像設專金閣藤相墳學層玉樓百代
本支麗不億何無此處一回頭

一下淀河舟中作

北岸如行南岸走適前山也畫後山也蒼飽恍不

尾藤高志尹二洲良助

待成吾句勝處忽棄須史秋風入杏溟

一元日

尾藤聲

城闕春開曙色鮮門々松竹澹浮烟素袍
烏帽映初日青笠綠簑經幾年薄官二毛
懶得意明時一遇好堪憐自知故態終難改
朝罷床頭抱膝眠

一不二山

惟一齋片佐藤坦

万仞之峯高嶮々身坐世界看山大若使天
地肖人形渠是曠中一小塊

一 看日何目捷連

十六弟子摩多河をたふす大とる日
連の移族多た天とて字をた列る

摩訶訶迦系 二人の子あり皆迦系と云也耶迦系
周利槃陀伽 一名槃特 天竺名師也
一 那由可必ある云

佛おぼるるはたのハ情まま我の千由親喜那智山智
峯より印はたお免き懼く有昭葉の位なるる
文縁度世の人のこと

一 名を此ハ情官の家ハ依地々の筆之四行一りぬハ
お免きとそと補して

○ 源等のえ及道の死えは四行なり
○ 六のけつは蓮宗なるをさの佛の教しるるは
新也のこもあつてくもつてつと

流のるい新也と流一や秋の色 男也

○ 百丈山石峯程香の流るるは冥山の草葉のこつ世
千果^{センガ}れあこまの家の即非のまゝなる着眼と
り

○ 天香山佛あさの依え地山の東よりつて冥界ハ草葉
あせるるはあまのたぬ福列の人の必あると年
ゆわくはあ。

○ 宇治甲武のハ免道とも名をたハ氷魚鱧^{ミナギ}鱧
鮎^{一必}鱧^{二必}鱧^{三必}鱧^{四必}鱧^{五必}鱧^{六必}鱧^{七必}鱧^{八必}鱧^{九必}鱧^{十必}鱧^{十一必}鱧^{十二必}鱧^{十三必}鱧^{十四必}鱧^{十五必}鱧^{十六必}鱧^{十七必}鱧^{十八必}鱧^{十九必}鱧^{二十必}鱧^{二十一必}鱧^{二十二必}鱧^{二十三必}鱧^{二十四必}鱧^{二十五必}鱧^{二十六必}鱧^{二十七必}鱧^{二十八必}鱧^{二十九必}鱧^{三十必}鱧^{三十一必}鱧^{三十二必}鱧^{三十三必}鱧^{三十四必}鱧^{三十五必}鱧^{三十六必}鱧^{三十七必}鱧^{三十八必}鱧^{三十九必}鱧^{四十必}鱧^{四十一必}鱧^{四十二必}鱧^{四十三必}鱧^{四十四必}鱧^{四十五必}鱧^{四十六必}鱧^{四十七必}鱧^{四十八必}鱧^{四十九必}鱧^{五十必}鱧^{五十一必}鱧^{五十二必}鱧^{五十三必}鱧^{五十四必}鱧^{五十五必}鱧^{五十六必}鱧^{五十七必}鱧^{五十八必}鱧^{五十九必}鱧^{六十必}鱧^{六十一必}鱧^{六十二必}鱧^{六十三必}鱧^{六十四必}鱧^{六十五必}鱧^{六十六必}鱧^{六十七必}鱧^{六十八必}鱧^{六十九必}鱧^{七十必}鱧^{七十一必}鱧^{七十二必}鱧^{七十三必}鱧^{七十四必}鱧^{七十五必}鱧^{七十六必}鱧^{七十七必}鱧^{七十八必}鱧^{七十九必}鱧^{八十必}鱧^{八十一必}鱧^{八十二必}鱧^{八十三必}鱧^{八十四必}鱧^{八十五必}鱧^{八十六必}鱧^{八十七必}鱧^{八十八必}鱧^{八十九必}鱧^{九十必}鱧^{九十一必}鱧^{九十二必}鱧^{九十三必}鱧^{九十四必}鱧^{九十五必}鱧^{九十六必}鱧^{九十七必}鱧^{九十八必}鱧^{九十九必}鱧^{百必}鱧

○ 葉ハ極京よりして天下はあつて顧渚山の耳
もも鳳凰山の新結もあつてのたをぬ

○ 妙勝禪寺ハ中津川の西葦村ニ在リ 妙恩庵ト号ス
 冥基ハ大應大師西意事申テ創シ康正の氏一休
 有真ト號シ恩菴の家ニ休メシニ方丈の庭ハ佐川
 田長六リ好シクあり

○ 慶安名山朝日山嶽 白雲寺ト号シ中津川阿左子山
 橋ノ北ニ在リテ多クハ修持所トシテ大徳靈堂トシテ布比ハ
 右軍地蔵ノ一住ニテ天竺の目羅^{ニヤラ}唐土の是^ゼ鬼^{カイ}日
 本の古師坊トシテ鬼ハ衆魔のチカホト

○ 徳和山ニセシテ在リテ内也山也 柳也蓮也地也
 年也化也
 貞丈新化ト云

○ 西死ニサ蔭涼郭ト云ハ京故おもむきの内ノ古家の
 名ニ付テ蔭涼郭ノ住僧系故右軍家の世代トシテ
 慶中ノ系トシテ方極出家ニ成ルニ由對面ノ村ニ在リテ
 俗ヲ和ラレニサ蔭涼郭ハおもむきの西也ト西也
 ト云ハ蔭涼郭ノ官ニ出世ノ住僧系トシテ自ら早寮
 西也ト東也ト云ハ内也ト西也ト云ハ私ノ信ニ東也ト
 禁裏ト云ハ信丹ト東也ト云ハ老也ト和也ト云
 紫衣ト云ハ信丹ト云

○ 公人朝夕人ト云ハ朝死ト云ハ公人ハくあんト云ハ
 朝夕人ハちやうぢやうあんト云ハ公人ト云ハ朝夕人
 ト云ハ朝死ト云ハ公人ト云ハ朝夕人ト云ハ朝夕人ト云ハ

かゝ身とをきりて秀方にてあつて人々を人ゆつて
秀方にて一且修りては徳業ののちと公を秀方
とをてて印時と別名を漢とをてててててて
そんすいひててててててて一契師のこゝ
片身とててててててててててててててて
神業とててててててててててててててて
あつてててててててててててててててて
るわいりてててててててててててててて
まの保を七年の月たむ

東宮師え後修徳業は 修徳長風 東宮師
おまゝおまゝおまゝおまゝおまゝおまゝおまゝおまゝ

うまかぬけのうまかぬけのうまかぬけの
あまゆき天う下まゆきあまゆきあまゆき
いとふんもつてせいなめててててててて

和漢同業

擁書万巻何假南面百城
保氏と一のまをてててててててててて
よくちあしそひてててててててててて
あつてててててててててててててて

一 ます八分古法のおせり

短冊幅 屋風縁 冠の縁 鞆の縁 糊指
足跡の藺る 不修実を底板 大中院巻を底の

由祖の事こちやし神楽ささるれとたの方か
ハチある竹藪数軒中為ありけ敷敷のちちみ
えうりも入る手桶をうさ桶の事あもいなるま
らう桶をききしとよふちあるるをさう侍子
れを建て吾の物乃敷敷の人ハちくあひしと下
てさちしハを隣の民研次のを市こち根敷子の
敷とけ桶のちちく投入てをぬゆしよ自ら吾
のあひまきしとよふけふ吾の物ハ供のあひ熱い田
神供とけしけふ桶をさく神供の目こ也甘味を
けしことしつくとあ志孔の物ハ大なる出陣して
魏と成の時目さ熱うとくちうてぬ幾りん買ハ幾あ

利有り孔の女供を日さ熱い送つてさうしむる
想て幾りんとさうし目さ熱う云く豈かこ也地まは
有印者也さくやまらうの事ハ信所ハこま記と
しきと屋供の人ハあるとて敬よここの物の後幾り田
の神供しつとよまらうとよ何とよさるるや

○六月廿九日水口を町を茶搦田川辺ち水海一ちりれハ
是地ちく又水ハ引かせくさく大なる水に夜入
席上四五人水舟ハ桶俵の事候る二十余ヶ村くと
よ十人是を預れハ十人大同やまこ只中一ハまきま
るとのハ大坂の船ハの七月廿日東の借水とさあ
そ文よ六月廿九日ハ大なる水候候言ちよ也

才下亦知過又一才不ハ務官余切まか東の方まひ粟
者正生室高橋現世切過一粟刈海及中山左々者
と世本留らるる布不川糸三圍・秋糸を造出水付て
凡るもの死ある元極出さうら川世ハ良の二百餘と
海もその如く流れるのよーヤリ也。

○ いらぬ常陸若仲吉のとき弘治ハ伴の路る一義仲
の墓ハもろく後よ建一ものこと也

○ 常陸の流

吟々う家ハ今う於東山まらう々々のるんと常弘藩む
すー門花の藤ハ斤竹をすて仍く我酒妙々天下妙
伊丹雙白價不満の教テ字と作しうその外の物ハ

板面紙裁しそよめけあうよてらんよくの田東名あん
数もすー吟々う財ハらん藪一程るうらるゆんふぬめ
ハ糸の料也もあらるる

○ 常山の料也兼金のをーハ法師を肉含まき市こ
いつまも何何何と稱れ世を名を兼之料也もよ

○ 一浮洲ハ秀ハ僕よ一勢らう大坂の浮洲ハたぬを
足て葉しきよのハ以洲大糸の志也葉又鞍するの信白

めをち糸女のさかき掃まハむらふ掃の方を掃ま
まをてをここの女の年ををまきてゆきうはるるゆ
めう

○ 足て葉るうれめ々々のハ東西の門終に常葉在歡

好古者、要物

る券云云、中、カ、ウ、リ、一、付、ぬ、り、ち、り、も、不、必、文、仲、子、校、圖、
して、念、ぬ、る、の、形、ひ、を、を、後、漢、文、に、益、あ、り、と、い、ひ、
こ、ろ、ち、し、る、わ、り、と、ぬ、ら、い、れ、と、昔、ま、あ、り、と、い、ひ、
い、い、と、あ、り、る、の、文、仲、子、を、圖、て、念、地、と、才、の、類、を、え、
半、い、う、ま、ど、と、い、ふ、書、之、ハ、画、を、あ、り、ふ、もの、を、初、め、と
写、さ、る、せ、ん、と、思、ひ、て、あ、り、ま、れ、歎、ふ、ま、れ、を、あ、り、と、い、
つ、と、い、ふ、わ、り、と、い、ふ、と、念、を、よ、く、念、を、こ、も、画、本、を、え、
写、さ、る、ハ、お、の、つ、り、と、念、を、こ、も、り、初、め、書、か、怪、を、漢、語、を、
と、と、と、い、ひ、と、い、ふ、わ、り、と、い、ふ、と、念、を、よ、く、念、を、こ、も、
後、子、百、家、の、書、を、見、る、時、に、百、年、に、憶、し、る、を、念、と、い、ふ、

思ひあはして忽地感懐をうとらう、た子不を賢人の
く、教、ま、り、る、の、物、は、存、を、ま、れ、さ、る、と、い、ふ、一、平、か、少、後、
棟、史、と、い、ふ、と、い、ふ、わ、り、と、い、ふ、と、念、を、よ、く、念、を、こ、も、

古多、物の名も、下、よ、う、と、う、り、る、り、と、く、古、を、道、作、
連、分、一、菟、坂、皮、集、十、四、兼、ノ、連、分、一、菟、の、名、も、下、よ、う、と、
う、り、る、の、割、皮、の、サ、ハ、い、せ、の、漢、文、秋、救、海、法、原、

顔氏家訓。顔之推、カ、云、ク、江、南、に、有、一、権、貴、人、
讀、誤、本、蜀、都、賦、注、鮮、蹲、鴟、ハ、芋、也、乃、チ、為、ス、
羊、字、ト、人、饋、ニ、羊、肉、答、書、云、捐、惠、蹲、鴟、一、舉、朝、
驚、駭、不、鮮、事、義、

竹田出雲の傳、と、い、ふ、
假、名、本、本、丸、長、糸、を、子、子、ハ、

子罪を悟てそ人を不悟といふとさうさうははらぬ
ことを知るよひに罪と人といふよりさうさうははらぬ
徳の中よりつゝ我れを罪とらうとさうははらぬ孔子これと悪
多りて公治長り一実子罪をらうとさうははらぬといふて伴嫁
多りて人や孔叢子とさうははらぬ但し罪といふは
之を免てそ人とさうははらぬ罪とせしは後世
の免れりては行田由雲ハ孔叢子とさうははらぬこと
ありて始末をさうははらぬ

孔叢子上巻論書第二云孔子曰可哉古
之聽弘者悪其意不悪其人ヲ求所以生之
不得所以生ス乃刑之君必與衆共焉人テ之聽

弘者不悪其意而悪其人求所以教是反古之
道也又つて一罪と意とさうははらぬ易一孔叢
子ハ傳書ことハ吾人の所をらうとさうははらぬ
之を味極て流せり

- 信曰古の学者ハ為己今之学者ハ為人
- 一 老人能任は村を教ふ
- 中身は家ハ今之の割にのこりて成は長と今之の母や
て割をよと母の業の會をよとさうははらぬ
- 峯城集の梅梅と字川田一とさうははらぬ湖海村史より
あはれ母とさうははらぬ
- 或画師一終と画師一自姓名とさうははらぬ

と筆をせしむるは、
能く筆を筆するは、
多しぬ人子、
の文章、
まろり也

○ 西徹うと文のすをたしとよとらるるん

くちをたさる人さくやまぬるんくちくち世の秋の夕を

○ 刺をき流といふは雪、
のる刺うりりくぬひるんくち

○ 髪須ハ、
つらひはうてかりきくするんくち

一 毎方天ハ、
一 是優上人の列、

も危きる人あり、
るといはせよ、
存今下は、
くちまきぬるん

くちまきぬるん、
してまき業の、
一 南殿の、
例と、
をけ、
植らる

をけ、
植らる

子と女の区別を孫と女の区別と志しおる一孫子十と
公卿ハ多法の體用備ぬの理と仰一壽考云ふ云の
用を兼ぬやうたふ芽元儀う曰孫子以と孫子
る一以り孫子なる一と云う

一孫武ハ伍子胥子賢よりて多法を會せらるるを以て
是の圖圖とを以て大凡と一楚を攻め晋を獲し
て大功を立くるとして元皇王媿れりて其の如れん
るを以て信を辭して古々の母は過すに非く
母は母と有りは欲せらるるしてお發り有りといは
るふは母と如けて是は欲せらるるに非くは母と欲は
されりといふは是れを愛欲といふを以てはるるといふ

徳のちのこころ

吳越ハ魯の如きものにして其の如きと云ふこと
母死して子若くは子孫を推して其の如きと
云ふこと其の如きもの如きもの如きもの如きもの
如きもの如きもの如きもの如きもの如きもの如きもの
と云ふこと其の如きもの如きもの如きもの如きもの
の如きもの如きもの如きもの如きもの如きもの如きもの
已り其の如きもの如きもの如きもの如きもの如きもの
見らるる如きもの如きもの如きもの如きもの如きもの
は神一亦其の如きもの如きもの如きもの如きもの如きもの
を及ぶるもの如きもの如きもの如きもの如きもの如きもの

子持まるりりり

○ 女^{おな}学^{まな}子^ことらあ^あの^のひ^ひさ^さる^る人^{ひと}某^{なつか}舞^ま某^{なつか}彦^{ひこ}と云^いふ^ふを^を文^{ぶん}
 く^く付^つく^く丸^{まる}ハ^ハ子^こ母^{はは}は^はな^なれ^れと^と申^{まを}は^はハ^ハ音^ね子^こは^はよ^よの^の
 け^けい^いと^とわ^わい^いぬ^ぬ人^{ひと}の^のよ^よる^る実^{まこと}名^なよ^よ付^つむ^むの^のか^から^らあ^あお^おて^てハ
 いう^いこ^こま^まハ^ハま^まと^と娘^{むすめ}と^とお^お身^みひ^ひくる^く。何^{なに}も^もそ^そも^も人^{ひと}の^の
 の^の称^{なづか}を^をう^うま^まう^うハ^ハま^まと^とい^いハ^ハ子^この^の自^{みづか}稱^{なづか}の^の称^{なづか}ハ
 ハ^ハゆ^ゆお^おう^うつ^つる^ると^とい^いふ^ふ何^{なに}の^のた^たら^らき^きと^とい^いふ^ふは^はあ^あて^てハ^ハま^ま
 さ^さー^ーも^もら^らぬ^ぬや^や牛^{うし}角^{かく}の^の後^{のち}へ^へは^はも^も丸^{まる}と^とい^いふ^ふま^まつ^つ
 う^うは^は天^{あま}平^{ひら}徳^{とく}室^{むろ}の^の東^{あづま}ち^ちも^もの^の女^め婢^ひ某^{なつか}某^{なつか}と^とい^いふ^ふ
 い^いふ^ふ名^な多^{おほ}く^くや^や治^ち隆^{りゆう}某^{なつか}某^{なつか}と^とい^いふ^ふ名^なを^を称^{なづか}ま^まう^うと^とい^いふ^ふ
 稱^{なづか}ハ^ハ何^{なに}れ^れハ^ハ名^なを^をい^いふ^ふま^まう^うと^とい^いふ^ふ。何^{なに}れ^れハ^ハ子^この^の名^なと^とい^いふ^ふハ

着^きま^まら^らり^り。後^{のち}牛^{うし}角^{かく}の^の牛^{うし}ハ^ハ膜^{まくら}丸^{まる}り^り。た^たか^かり^りこ^こな
 け^けう^う笛^{ふエ}何^{なに}あ^あま^まう^うは^はも^も某^{なつか}丸^{まる}と^とい^いふ^ふ名^な多^{おほ}く^くつ^つけ^けこ^こな
 ハ^ハさ^さら^らる^るま^まう^うは^はま^まう^うハ^ハ舟^{ふね}の^のま^まは^はま^まう^うと^とい^いふ^ふこ^こな
 ○ 某^{なつか}後^{のち}純^{じゆん}色^{しき}子^こ潔^{けつ}くる^く布^{ぬい}の^のま^まは^は親^{おや}戚^{せき}の^のあ^あり^りひ^ひま^まと^とい^いふ^ふ
 日^ひ敷^{しき}の^の所^{ところ}け^けを^をま^まる^る所^{ところ}ま^まは^はま^まと^とい^いふ^ふ名^なと^とい^いふ^ふ純^{じゆん}色^{しき}ハ
 今^{いま}氣^き色^{しき}と^とい^いふ^ふま^まう^うは^はま^まう^うハ^ハ人^{ひと}の^の親^{おや}と^とい^いふ^ふま^まう^うは^は
 毛^け色^{しき}の^の色^{しき}を^をい^いふ^ふま^まう^うハ^ハ人^{ひと}の^の名^なと^とい^いふ^ふハ^ハ
 ○ 壬^{みづのえ}子^こ世^よの^の人^{ひと}の^の名^なを^をい^いふ^ふま^まう^うハ^ハ人^{ひと}の^の名^なと^とい^いふ^ふハ^ハ
 余^{あま}を^をい^いふ^ふま^まう^うハ^ハ人^{ひと}の^の名^なと^とい^いふ^ふハ^ハ
 今^{いま}も^も子^この^の名^なと^とい^いふ^ふま^まう^うハ^ハ人^{ひと}の^の名^なと^とい^いふ^ふハ^ハ
 今^{いま}も^も子^この^の名^なと^とい^いふ^ふま^まう^うハ^ハ人^{ひと}の^の名^なと^とい^いふ^ふハ^ハ

正へんしんりひひらちふるのいられ水を月と云い水個をて
こころの意と水を漱らふり花をいられつるあるしや
さむくけ月ハえやまきるるふらうて印後まきるるおら
らぬらのもやすしぬらるフツキとふるのさし文月の
若るるしゝとも見えぬハツキとあるの以月を景月といふ
る漢もも見しゝゝのあらあれてそまの又疑へしやまらり
長月陽月のこころの漢も古くしひ得しあるのを
陽月と漢てかこナツキといひハカモノツキといひて
こそたしひあふ集のなう種違ひとちるをしを漢
てかこナツキといふことゝ古物ハノとらあけして
ナとらふしゝのらうあしぬらるのいんたハカこころ

くわいせいのナツキといひて圖のいんたハカこころのいんた
ナツキといふことゝ一は月といふの漢もあつゝいひ
るるあつゝおら九月といひて我いそは十二月を
いひてそ月ハ見えぬをまといぬらるのあつゝハス
といふの漢も十二月を歳終といひていゝゝの終
まといゝらうち終は年をトシといひてあつゝいひ
ナとらふしゝのらうあしぬらるのいんたハカこころのいひ
ハトといひてあつゝいひ得ていゝゝのいんたハカ
ぬらるのいんたハカこころのいんたハカこころのいんたハカ
こころのいんたハカこころのいんたハカこころのいんたハカ
こころのいんたハカこころのいんたハカこころのいんたハカ
こころのいんたハカこころのいんたハカこころのいんたハカ

はハワともハスともいふことなれども系集は極の字傳にて
ハワともいふは後極月の字を用ひてハスともいふる
也

一 陶甄の工のときも天孫のついでに天降するに時より
そのついでにしるすに後神武天皇の八千九百師と
いふに時天香山社中七とありしめらるる天孫籠八
十枚并造^{イサ}金尾^{イサ}而糸^{イサ}天孫地始^{イサ}といふこと足し
後之れ部^{イサ}八千九百師とありしめらるるそのこと
小史と陶工のついでに始^{イサ}
一 書工の始^{イサ}といふるに繪畫の字たる後て工といふは
の字の着のころに始^{イサ}といふるに秋麻郡

直墨綿のものを死して須佐能乎命の由子磐坂り子
命け地の形也書翰^{イサ}一^{イサ}の^{イサ}い^{イサ}一^{イサ}た^{イサ}惠^{イサ}伴^{イサ}といひ
こと神武の信よりして今の字は改めしことあり
ことけは^{イサ}い^{イサ}の^{イサ}の^{イサ}の^{イサ}我^{イサ}の^{イサ}の上^{イサ}世^{イサ}よりあり
ことけは^{イサ}い^{イサ}の^{イサ}の^{イサ}の^{イサ}い^{イサ}へ^{イサ}る^{イサ}書^{イサ}工^{イサ}の^{イサ}年^{イサ}
又へ^{イサ}一^{イサ}の^{イサ}旗^{イサ}の^{イサ}の^{イサ}の^{イサ}魏^{イサ}安^{イサ}王^{イサ}の^{イサ}後^{イサ}曹^{イサ}氏^{イサ}一
名の^{イサ}辰^{イサ}貴^{イサ}といふ^{イサ}の^{イサ}の^{イサ}の^{イサ}の^{イサ}と^{イサ}言^{イサ}ふ^{イサ}これ^{イサ}大^{イサ}國^{イサ}
を^{イサ}す^{イサ}こと^{イサ}祖^{イサ}と^{イサ}收^{イサ}氏^{イサ}孫^{イサ}と^{イサ}入^{イサ}崇^{イサ}峻^{イサ}天^{イサ}皇^{イサ}の^{イサ}所^{イサ}世^{イサ}は^{イサ}百^{イサ}姓^{イサ}
と^{イサ}書^{イサ}工^{イサ}白^{イサ}加^{イサ}と^{イサ}い^{イサ}ふ^{イサ}に^{イサ}後^{イサ}推^{イサ}古^{イサ}天^{イサ}皇^{イサ}十^{イサ}三^{イサ}年^{イサ}秋^{イサ}始^{イサ}め^{イサ}
て^{イサ}其^{イサ}の^{イサ}書^{イサ}工^{イサ}山^{イサ}背^{イサ}書^{イサ}工^{イサ}と^{イサ}い^{イサ}ふ^{イサ}こと^{イサ}日本^{イサ}に^{イサ}い^{イサ}ふ^{イサ}
を^{イサ}始^{イサ}め^{イサ}る^{イサ}こと^{イサ}

一 嘆ハ父ケ義不伴早化ハ嘆の字添テハタ工といひ
耕ハ麦ミ田ハ後モトれケリ後ハ抄ハ口印記師伝を
引テハ父ケと後モトれケリ田の字を引テ後ハ抄ハ口
南畠後モトれケリを引テ畠一日陸田ハ父ケと後モト
後モトれケリと畠の字引故ハ書モトハ父ケと後モト
古の信字ハ口ケリケリ後ハ抄ハ火田の字を引テ
漢抄を引テヤイハ父ケと後モトれケリケリケリケリ
とよミテケリケリケリケリケリケリケリケリケリケリ
ケリケリケリケリケリケリケリケリケリケリケリケリ
後田ハ又信ハ畑の字を用ひテハ父ケと後モトれケリケリ
ケリケリケリケリケリケリケリケリケリケリケリケリ
ケリケリケリケリケリケリケリケリケリケリケリケリ

小首抄

